新　入　生　の　諸　君　へ

茅　　誠　　司（物理・名誉教授）

1．大学は異なった意見が共存する場であること。

こんなことは大学の本質として極めて初歩的なことで，改めて言う必要がないかも知れない。しかし共存するということは，中々六ケ敷いことで，実際には多くの大学で異なる意見の群の間に闘争が起ったり極端な場合には暴力が行使されたりする。これは極めて悲しむべきことで，大学の本質を破壊するものと言わねばならない。新入生の諸君に望むことは，大学は学問研究の場であり，従って異なる意見の共存を認め，暴力による闘争の場にならないよう守って頂きたいということである。

2．大学を自分の大学と考えること。

入学したてはなかなか自分の大学という実感は湧かないかもしれない。しかしいつまでもそうであっては困る。例えば大学内の到るところに様々な宣伝ビラが貼ってあって，外から校内に入った人はその雑然とした見苦しさに眉をひそめることが多い。諸君は，これが自分の住む家であった場合はこれを整理し規正することを考えるに違いない。しかしこんなに汚く貼りめぐらされていても何故大学当局はそれに手を打たないのかと大学の手ぬるさを唯頭の中でせめるくらいであって，なかなか行動を起さないのが普通である。

諸君に私の要求するのは，大学当局をせめる前に，自分達で何かできないものかを考えて，それを実行に移して欲しいことである。それがやがては大学を自己と考え，連帯責任感を持って大学の本質を守りぬくことにつながって行くことと思う。

3．大学を人間的接触の場としよう。

大都会の中の大きい大学は，連続する講演の会場みたいになり勝ちである。特に法学部とか経済学部などでは数百名の学生の前で講義が行なわれ，それに対する質問とか討論を十分行なう機会が少ないので，宛もテレビで講義をきくのと違いはないようにも思われる。なまの講義の特長は，質問，討論を通じて講義の内容により深い理解が得られると同時に，先生と学生同志の間に人間的な触れあいが生じることであろう。よき師，よき友を得るか否かはその人生を豊かなものにするか否かの鍵である。

この意味で人数の限られた学生の間に持たれるセミナーを通じて先生との人間的触れ合いを作ることは極めて大切である。学生諸君は，より積極的にセミナーの開催を要求されこれに参加されることを希望する。

4．学問に没頭せよ。

私が大学を卒業したのは 1923 年だったが，それは丁度私の専攻する物理学が古典物理学から量子物理学へ脱皮する直前であった。分子や原子の大いさの空間（1億分の1センチ）ではニュートンの物理学のみでは説明しきれない多くの現象が山積していた。これが 1925・6年になってシュレーディンガー，ハイゼンベルクの2人によって見事に解決されてしまったが，私共は当時学生であったがこの脱皮直前の物理学の様相に魅せられて，夢中だった。それから 50 年を経た今日もその頃の私共の勉強に没頭した姿が忘れられないし，またその頃のわれわれを幸福だったと思っている。諸君にも是非そのような想い出を持って貰いたいと思う。

5．個の充実について。

これからの社会人は生涯教育を通じて一生それぞれの個の充実に努めなければならないと説かれている。大学へ入学当初はこの個の充実のために一般教養課目が当てられ，本郷に来る前に駒場でその講義をきくことになっている。しかし個の充実とは，ただ講義だけで達成されるものではない。勿論講義をきいてそれを消化することは大切であるが，個というのは，ことに所して自らの意見を持つことのできる能力と，その自己の意見に従って行動する強固な意志のあることを意味する。したがって知識は必要ではあるがそれだけでは十分ではない。論語は，これを書いた孔子が目下中国で批判を受けているが，私はその中の「君子和而不同，小人同而不和」という句を座右の銘としている。この和而不同の精神を持つことこそは個の充実を目指す目標であると信じている。諸君も時に応じて自分の行動を反省し，小人同而不和とならないよう自戒されんことを希望する。